

## 患者さんとの接点（2）

学生時代「1 + 1は必ずしも2ではないということを説明できるか」と問われたことがある。その時には、言葉の持つ意味など真剣に考えることも無かった。「間違いは許されない」「間違っってはならない」ということが第一の医療社会にあって、＜医療行為によって生じる結果は不可逆的なことは多く、もう一度試すということができない＞ということを目の当たりにして、その意味が分かる心境になった。特に、妊娠や分娩に関係したケースは、忘れてしまいたいと思っても決して脳裏から消え去るものではない。子宮破裂や帝王切開後に感染を繰り返し搬送された患者さんの子宮を摘出したこと等、今でも胸を締めつけられる思いである。

子宮頸部（しきゅうけいぶ）に大きな筋腫を合併し、切迫流産で入院していた妊婦さんで出産も間近になり超音波で胎児の発育をチェックしていた時、「手術は先生にお願いしたい・・・」と言われ、最初から経過を診ていたので心配は要らないと言って了解した。骨盤腔(ダグラスか窩)を占有する頸部筋腫のため、妊娠経過中から「分娩は帝王切開で」と説明していたが、改めて手術時に予想されることも説明し、ご主人にも手術承諾を得て手術に臨んだ。通常の帝王切開とは違い、かなり上方で子宮下部に横切開を入れた。しかし、子宮筋腫核が露出し、子宮腔に入れられないため、さらに上方に切開創を加えなおして胎児を娩出した。子宮の切開創を修復するために創部を検索し、子宮と筋腫の関係を知った時、全身から血の気が抜けていくような思いを今でもはっきりと覚えている。

至急頸部の筋腫と思っていたのが、何と子宮の体部に発生した筋腫で、その筋腫がナイフのように折れ曲がるように骨盤腔に陥入していたのである。そのため子宮頸部は考えられないほど引き伸ばされていて、最初の切開で頸部を切断していたのである。出血も多く、修復は困難と判断され、子宮摘出を余儀なくされてしまった。

手術後、ご主人に説明して了解を得たが、本人には後日詳しく説明することになった。期待を裏切る結果となり、目を真っ赤にして悲しみをこらえる姿に、産まれた子どもが健やかに育ってくれることを祈るだけであった。退院時に、改めて手術時の状況を説明したが、目の奥に寂しさを隠しきれないように感じられたものの、本人の口からはお世話になったことへのお礼の言葉が返ってきた。

その後、ある看護婦が「先生、彼女がどんな思いで気持ちを整理したか分かりますか？」と問うてきた。答えに戸惑っていると、「自分は結果に対しては仕方がないと思っている。しかし、もう子どもが産めないと思うと主人に悪くて・・・。その主人が、“術後の説明をしてくれた先生の態度を見た時、先生の本当の気持ちを理解することができた”と言ってくれ、気持ちの整理ができた」と涙をこらえながら話してくれたことを聞かされた。

＜1 + 1＞がマイナスになる場合があることを身をもって教えられた。人が行う医療であるがために＜インフォームド・コンセント＞が大切であることを痛感させられ、その結果には医療を行った者に責任があるということも。